

## 第 1 回山形県新博物館基本構想検討委員会

日時：令和 6 年 7 月 16 日（火）  
15 時 30 分から 17 時まで  
会場：山形県庁 2 階講堂

### 次 第

- 1 開 会
- 2 あいさつ
- 3 出席者紹介
- 4 議 事
  - (1) 委員長の互選について
  - (2) 説明・協議
    - ① 山形県立博物館の概要について
    - ② これまでの経過及び有識者会議等における御意見について
    - ③ 新博物館基本構想策定に係る今後の進め方について
- 5 そ の 他
- 6 閉 会

## 第1回山形県新博物館基本構想検討委員会出席者名簿

日時：令和6年7月16日（火）

場所：山形県庁2階講堂

### 【委員】

No	所属等	氏名	備考
1	山形県文化財保護協会会長 山形大学名誉教授	伊藤 清郎 <small>いとう きよお</small>	
2	立正大学地球環境科学部博物館学教授 埼玉県立川の博物館館長	小川 義和 <small>おがわ よしかず</small>	
3	国立科学博物館理事（兼）副館長	栗原 祐司 <small>くりはら ゆうじ</small>	欠席 （書面提出）
4	株式会社JTB総合研究所執行役員 地域交流共創部長	河野まゆ子 <small>こうの まゆこ</small>	
5	山形大学学士課程基盤教育院教授 山形大学附属博物館学芸研究員	佐藤 琴 <small>さとう こと</small>	
6	北海道大学大学院文学研究院講師	卓 彦伶 <small>たく げんれい</small>	
7	株式会社三菱総合研究所社会インフラ事業本部 都市イノベーショングループシニアコンサルタント	松永 久 <small>まつなが ひさし</small>	
8	やまがた農業女子ネットワーク発起人 まるつね果樹園共同代表	結城こずえ <small>ゆうき こずえ</small>	

（敬称略、五十音順）

### 【事務局】

所属・職名	氏名	備考
山形県みらい企画創造部長	小中 章雄	
山形県みらい企画創造部 重要プロジェクト等推進監（兼）次長	相田 健一	
山形県みらい企画創造部 企画調整課重要プロジェクト等推進主幹	高橋 聡	
山形県健康福祉部 障がい福祉課障がい者活躍・賃金向上推進室長	高橋 育子	
山形県観光文化スポーツ部 県民文化芸術振興課長（兼）博物館・文化財保存活用室長	中村 雪子	
山形県立博物館長	齋藤 祐一	
山形県教育局 生涯教育・学習振興課長	東海林 靖志	
山形県教育局 義務教育課長	高橋 典子	

### 【新博物館基本構想基礎調査業務委託事業者】

所属・職名	氏名	備考
株式会社乃村工藝社クリエイティブ本部プランニングプロデュースセンター 企画2部部長	渡邊 創	オンライン
株式会社乃村工藝社クリエイティブ本部プランニングプロデュースセンター 企画2部第6ルームチーム	亀山 裕市	
株式会社乃村工藝社営業推進本部文化環境事業部 営業1部第2課課長	横田 浩志	
株式会社乃村工藝社クリエイティブ本部プランニングプロデュースセンター 企画2部第6ルーム	金子 英人	
株式会社乃村工藝社営業推進本部文化環境事業部 営業1部第2課主任	井上 悟	

## 山形県新博物館基本構想検討委員会設置要綱

## (設置)

第1条 山形県立博物館の移転整備に係る基本的な方向性を示す新博物館基本構想を策定するに当たり、有識者等の意見を反映するため、山形県新博物館基本構想検討委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

## (所管事項)

第2条 委員会は、次に掲げる事項について検討を行うとともに、検討結果の取りまとめを行うものとする。

- (1) 新博物館の理念・コンセプトに関する事項
- (2) 新博物館の機能に関する事項
- (3) 新博物館の施設整備に関する事項
- (4) 新博物館の管理運営に関する事項
- (5) 新博物館開館までの進め方に関する事項
- (6) その他新博物館基本構想の策定に関して必要な事項

## (委員及び委員長)

第3条 委員会の委員は、別紙のとおりとする。

- 2 委員の任期は、この要綱の施行の日から令和7年3月31日までとする。ただし、必要に応じて延長することができる。
- 3 委員会に委員長を置き、委員の互選により定める。
- 4 委員長は、会務を総理し、委員会を代表する。
- 5 委員長に事故があるとき又は委員長が欠けたときは、委員長があらかじめ指名する委員が、その職務を代理する。

## (会議)

第4条 委員会の会議（以下「会議」という。）は、委員長が招集する。

- 2 委員長は、会議の議長となる。
- 3 会議は、委員の過半数の出席がなければ、開くことができない。
- 4 委員長は、必要があると認めるときは、委員以外の者を会議に出席させて意見等を述べさせ、又は説明させることができる。

## (庶務)

第5条 委員会の庶務は、山形県みらい企画創造部企画調整課において処理する。

## (委任)

第6条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に必要な事項は、委員長が別に定める。

## 附 則

この要綱は令和6年6月14日から施行する。

## 山形県新博物館基本構想検討委員会委員名簿

(敬称略、五十音順)

役 職 等	氏 名	備 考
山形県文化財保護協会会長 山形大学名誉教授	伊藤 清郎	
立正大学地球環境科学部地理学科教授 埼玉県立川の博物館館長	小川 義和	
国立科学博物館理事（兼）副館長	栗原 祐司	
株式会社 J T B 総合研究所執行役員 地域交流共創部長	河野まゆ子	
山形大学学士課程基盤教育院教授 山形大学附属博物館学芸研究員	佐藤 琴	
北海道大学大学院文学研究院講師	卓 彦伶	
株式会社三菱総合研究所社会インフラ事業本部 都市イノベーショングループシニアコンサルタント	松永 久	
やまがた農業女子ネットワーク発起人 まるつね果樹園共同代表	結城こずえ	

## 山形県立博物館の概要

## 1 施設概要

山形県立博物館（山形市霞城町、本館、昭和46年開館）

敷地面積 6,012㎡（うち駐車場370㎡）

建物延面積 4,230㎡（地下1階、地上2階、ペントハウス1階）

職員数 館長、副館長2、学芸員・研究員7、技術員8、事務職員8 計26名（分館含む）

山形県立博物館教育資料館（山形市緑町、分館、昭和55年開館）

山形県立博物館附属自然学習園（山辺町畑谷、天然記念物「琵琶沼」、昭和51年開設）

## 2 めざす博物館像

「創り、分かち合い、伝える博物館」

## 3 運営方針

- (1) 魅力的な展示、企画づくり
- (2) 資料の調査・研究及び保存・整理の充実
- (3) 社会教育、大学との連携、支援
- (4) 学校教育との連携支援
- (5) 積極的な情報発信、広報活動の展開

## 4 重点項目

- (1) 特別展及び企画展、教育普及活動の充実による満足度の向上
- (2) デジタル技術の活用による博物館の機能強化
- (3) 収蔵資料の整理、データベース更新
- (4) 積極的な情報発信等の広報活動の充実による来館者数の増加
- (5) 学芸員の資質・能力の向上

## 5 収蔵資料などの概要

7部門（地学、植物、動物、考古、歴史、民俗、教育）、3施設（本館、分館、琵琶沼）を要する総合博物館。収蔵資料数は30万点以上（データベース登録予定資料含む）。

## 【各部門の公開資料数（令和6年4月1日現在）】

部門	自然系部門			人文系部門				文献 その他	計
	地学	植物	動物	考古	歴史	民俗	教育		
品数	11,828	75,453	41,105	11,890	26,013	11,508	40,633	43,254	261,684

## (1) 自然系各部門の特色と主な収蔵品

### ① 地学部門 (約1.2万点)

〔特色〕 ヤマガタダイカイギュウやハダカモミジガイ、クジラなど県内から産出したものを多く収蔵。全体に対する県内産の割合は、化石78%、岩石66%。化石・岩石ともに県内の地層を反映し、新生代新第三紀(約6600万年前以降)のものが最も多い。

〔主な収蔵品〕 ・ ヤマガタダイカイギュウ化石 <県指定天然記念物>  
・ ハダカモミジガイ (ひとでの化石) <県指定天然記念物>  
・ そろばん玉石 <県指定天然記念物>

### ② 植物部門 (約7.5万点)

〔特色〕 収蔵品には、山形県産維管束植物が絶滅種も含めてほぼ網羅されている。また明治・大正時代に作られた維管束植物標本が多く収蔵されており、それらは過去の植生を知る上で大変貴重。

〔主な収蔵品〕 ・ 結城嘉美、加藤元助、山下一夫、佐藤泉らのコレクション

### ③ 動物部門 (約4.1万点)

〔特色〕 山形県総合学術調査会で収集した動物資料を基本に発足。その後、石沢コレクション鳥類標本、世界各地の蝶や貝類など多くの寄贈資料を受け入れた。山形県内の昆虫、特に蛾類の標本も充実。

〔主な収蔵品〕 ・ 山形県産動物標本、石沢慈鳥コレクション鳥類標本  
・ 木俣繁コレクション蛾類標本、加藤繁富コレクション  
・ 鈴木稔コレクションほかの貝類標本  
・ 大石道明、黒沼孝一コレクションなどの蝶類標本 など

## (2) 人文系各部門の特色と主な収蔵品

### ① 考古部門 (約1.2万点)

〔特色〕 主に県内の考古資料について収蔵・保管・展示。山形県に人が住み始めた旧石器時代の資料(飯豊町上屋地遺跡)から縄文時代の土器・石器、弥生時代、古墳時代の土器など多数収蔵し、展示や出張博物館などの普及事業に役立てている。また、縄文土偶の「縄文の女神」について、隔月で展示解説会を実施。

〔主な収蔵品〕 ・ 土偶(縄文の女神)舟形町西ノ前遺跡出土 <国宝>  
・ 生石2遺跡出土弥生土器 <県指定有形文化財>  
・ 大之越古墳出土品 <県指定有形文化財>

### ② 歴史部門 (約2.6千点)

〔特色〕 山形県の歴史を物語る古文書類、絵図類を中心に収蔵。県内の旧家や寺院に伝わった資料が多く、各地域の行政・経済・文化などを知る手がかりとなる。絵図類には「羽州川通絵図」など最上川舟運に関するもの、「湯殿山道中一覽」など出羽三山に関するものなど。

- [主な収蔵品] ・ 江戸～昭和期の山形県に関する古文書類  
・ 「羽州川通絵図」 <県指定文化財>などの絵図類

### ③ 民俗部門 (約1.2千点)

[特 色] 本館第2展示室「米づくりとそのこころ」「農家のいろりばた」に代表されるように、古くから農業県として発展してきた山形の人々の暮らしにまつわる民具を多数収蔵。また、県内各地の郷土玩具（こけし、土人形、凧などのコレクションを含む）や焼き物、雪害調査所関係資料は、県全体を網羅する豊富な収集により、近代山形の伝統と暮らしを知ることができる貴重な収蔵品。

- [主な収蔵品] ・ ニセミノ <県有形民俗文化財>  
・ 雪害調査所関係資料ほか

### ④ 教育部門 (約4.1万点)

[特 色] 教育資料館（分館・教育部門）の建物は、国指定重要文化財「旧山形師範学校本館」。江戸時代から現代に至るまで、山形県の教育に関する歩みを展示・紹介。

- [主な収蔵品] ・ 江戸時代～昭和期「教科書コレクション」約12,000点を収蔵。

## 6 事業実績 (令和5年度) ※詳細は別添「令和6年度山形県立博物館報」のとおり

### (1) 企画展、特別展

- 第5回やまはくセレクション展 R5. 3. 4～5. 14
- 特別展「Bones -生き物の骨格はどうなっているのか-」 R5. 6. 3～8. 27
- プライム企画展「高等女学校と実科高等女学校 -青春の学びと生活-」 R5. 9. 30～12. 10
- 第6回やまはくセレクション展 R6. 3. 2～5. 12

### (2) 教育普及事業

- 企画展・特別展関連事業（展示解説会、記念講演、記念イベント）
- 講座・教室等（博物館講座、古文書講座、特別開館、ナイトミュージアム等）
- 友の会事業（友の会講演会、講座）

### (3) 博学連携

- 高校生学芸員一日体験講座
- 博物館実習見学（大学生、学芸員資格取得）
- 総合学習出張授業等
- 職場体験学習受入れ（インターンシップ）
- 教員研修（高等学校中堅教員等資質向上研修など）
- 出張講座（東北芸術工芸大学歴史遺産学科） 等

(4) 他館への資料貸出・展示

- マムロガワクジラ化石（真室川町立歴史民俗資料館）
- 国宝土偶「縄文の女神」（北海道博物館）

(5) 東北文化の日協賛イベント

- 高校生による音楽発表会

(6) 山形文化の回廊フェスティバル協力

- ワークショップ出展

(7) 本館の入館状況

月	開館 日数	有料入館者									無料入館者					合計	
		個人入館者			団体入館者			小計			減免分		使用許可 ・共催等	無料 公開	講座 その他		小計
		成年	未成年	計	成年	未成年	計	成年	未成年	計	件数	人数					
4	26	1,721	42	1,763	0	0	0	1,721	42	1,763	2	24	0	668	52	744	2,507
5	26	1,476	59	1,535	0	0	0	1,476	59	1,535	12	556	0	579	796	1,931	3,466
6	26	1,581	56	1,637	0	0	0	1,581	56	1,637	44	1,529	0	355	151	2,035	3,672
7	26	1,915	101	2,016	43	0	43	1,958	101	2,059	8	345	0	956	594	1,895	3,954
8	26	3,195	227	3,422	0	0	0	3,195	227	3,422	4	47	0	1,292	174	1,513	4,935
9	22	1,387	111	1,498	23	0	23	1,410	111	1,521	9	271	0	209	126	606	2,127
10	26	1,695	110	1,805	113	0	113	1,808	110	1,918	21	1,007	0	453	665	2,125	4,043
11	26	1,611	62	1,673	0	0	0	1,611	62	1,673	15	427	0	452	572	1,451	3,124
12	23	852	44	896	24	0	24	876	44	920	3	170	0	191	68	429	1,349
1	23	676	70	746	0	0	0	676	70	746	2	22	0	309	355	686	1,432
2	25	1,195	96	1,291	0	0	0	1,195	96	1,291	5	190	0	300	102	592	1,883
3	27	1,187	172	1,359	73	0	73	1,260	172	1,432	3	136	0	437	679	1,252	2,684
計	302	18,491	1,150	19,641	276	0	276	18,767	1,150	19,917	128	4,724	0	6,201	4,334	15,259	35,176

年度	297	15,967	1,394	17,361	306	0	306	16,273	1,394	17,667	160	5,665	0	5,512	2,879	14,056	31,723
比較	5	2,524	244	2,280	-30	0	-30	2,494	-244	2,250	-32	-941	0	689	1,455	1,203	3,453

## 令和4年度有識者懇談会及び令和5年度専門家懇談会等における 県立博物館の移転整備に係る主な御意見の概要

### 1 有識者等からの意見聴取

- 県では、開館から50年以上が経過し、施設・設備の老朽化が著しい県立博物館の移転整備に向けた具体的な検討に資するため、令和4年度に県内外の有識者による懇談会、令和5年度に博物館や文化財等に精通した専門家による懇談会及び地域博物館の実務者との意見交換会を開催し、新博物館に求める機能や、検討に際して留意すべき事項等について、様々な立場・角度からの意見を聴取した。

#### 《懇談会等の開催状況》

県立博物館移転整備に向けた有識者懇談会	計3回	(R4.7.1、R4.10.14、R5.2.4)
〃	専門家懇談会	計2回 (R5.10.25、R6.2.8)
〃	地域の博物館実務者との意見交換会	計1回 (R5.11.28)

### 2 御意見の取りまとめ

- 懇談会等で聴取した意見は、博物館の活動（機能）や管理運営などの関連項目ごとに集約し、別紙のとおり「県立博物館の移転整備に係る主な御意見」として取りまとめた。
- この御意見については、今後実施予定の県内の若者や各分野で活動する専門家からの意見聴取等の結果とあわせ、基本構想策定の参考として活用していく。

以上

## 令和4年度有識者懇談会及び令和5年度専門家懇談会等における 県立博物館の移転整備に係る主な御意見

### 【関連項目】

- 1 新県立博物館としての基本的な考え方について
- 2 検討を進める上での重要な視点について
- 3 博物館の活動（機能）について
  - (1) 展示公開機能
  - (2) 調査研究機能
  - (3) 収集・保管機能
  - (4) 教育普及機能
  - (5) その他の機能
    - ① 情報発信
    - ② 交流
    - ③ 多様な主体との協働
- 4 魅力ある持続可能な博物館運営に向けて
  - (1) 人材育成・確保
  - (2) 業務の効率化
  - (3) 財政等の基盤の確保
  - (4) 評価検証
  - (5) 社会との関係性の強化
- 5 開館に向けた取組について

## 1 新県立博物館としての基本的な考え方について

- ・ 総合博物館としてあらゆる分野が一緒になり、統合的な分野を生み、あらゆる方々が関わり人材を共有し、機能を統合し、新たな知識と価値を生み出す。
- ・ 山形県全体を見据え、県内の博物館や美術館、資料館等のネットワーク形成へのリーダーシップをとる。
- ・ 各地域の博物館の横のつながりにより一緒に課題解決に取り組み、県内全域の博物館の活性化につなげる。
- ・ それぞれの地域の文化を継承するため、また、県内各施設に誘導するため、山形県を一つの博物館ととらえることにより、地域の博物館や地域の研究団体をつなぐネットワークの核となる。
- ・ 博物館活動に関する県民の困り事を受けとめ、人と人、組織と組織をつなぎ、解決してくれるところにつなぐ。
- ・ 大学や研究機関と連携した資料の保管・保存対策や修復事業により県内博物館のサポート体制、広域での収蔵スペースの整備を図る。
- ・ 大学等研究機関との高度人材の共有、研究室の併設など大学との連携等により、創造性豊かに研究活動ができる環境をつくる。
- ・ 特に子どもの利用促進を図るため、地域の博物館と連携して子ども達が楽しめる機会をつくる。
- ・ 山形県内の県立文化施設との位置づけを整理し、機能を分担する。
- ・ 地域文化を損失のリスクから守る文化財の防災拠点となるとともに、災害時は、被災文化財の救済拠点の中心となる。
- ・ 各地域の悉皆調査など、地元の方との協働作業により文化財防災につなげる。
- ・ 独立行政法人国立文化財機構文化財防災センターなどの国、地域の文化遺産防災ネットワークである「山形文化遺産防災ネットワーク」、山形県が連携し地域の支援を担う。
- ・ リアルとデジタルの双方向的な活用、データに基づく技術的な学びと鑑賞に基づく感性の学びなど、機能の総合性を持つ。
- ・ 地域の各博物館組織のデジタル化や資料データの共有など組織横断的に統一したデジタル化により効率化を図る。

## 2 検討を進める上での重要な視点について

- ・ 少子高齢化、デジタル化、国際化など今後の社会変化へ対応するため、基本構想は定期的に見直すことが大切。
- ・ 基盤としての博物館として、現時点での利活用のみならず、後世の人々の利活用に向けて、ふさわしいものを構想する。
- ・ 今後、県立博物館をめぐる環境や置かれている立場も変わる中で、2050年あたりを見据え、7分野を網羅的にするのが良いか、ある程度特化するのが良いかを含めて存在意義を考える。

- ・ 周辺施設や地域企業との連携による経済効果の向上等、交通政策、観光政策も含めた広い視点で考える。
- ・ 山形県という土地に合ったものを検討し、周辺文化施設と連携した文化ゾーンを形成する。
- ・ 県内の方や移住された方のアイデンティティを育むと同時に、国内外の訪問客にも山形県の歴史や文化、自然を知ってもらうゲートウェイの役割を併せ持つことを検討する。
- ・ 利用促進のため、駐車場や休憩エリアなど利用者のニーズを把握するとともに、高速道路の降り口や道の駅など周辺インフラとの関係も視野に入れ、利便性を高めることを検討する。
- ・ マルチユース化、ショップやカフェ・レストラン、大規模な講堂やホール、ユニークベニューとしての活用により博物館の魅力を高める。
- ・ 施設のマルチユース化、複数の施設の集積によるコスト面、運営面での利便性の向上を図る。
- ・ 建設エリアには、自然・歴史・文化、利便性、ストーリー、それらの連携について、博物館の敷地内にとどまらないエリア全体のグランドデザインを描く。
- ・ 新県博の目的に応じた研究室や交流室などの諸室、動線、広さ、バリアフリー化などの視点で検討を行う。
- ・ デジタル化というのは、課題を解決させる手段であり、デジタル化によって何を指すのか、デジタル化の先にあるものを考える事が大事。
- ・ 実物があるということはどういうことか、実際に行って触れることの意義について、もう一度考える。

### 3 博物館の活動（機能）について

#### (1) 展示公開機能

- ・ 山形県ならではの自然、歴史、文化を現代の生活につなげて紹介することで身近に感じ魅力となる。
- ・ 資料の面白さやモノ・世界の見方自体を伝える。
- ・ 五感によるモノとの出会いの場をつくる。
- ・ 観光客に山形県を知ってもらうゲートウェイとなる。
- ・ 通常の展示とARやVR技術を組み合わせ、ハイブリッド型の体験的な楽しみができる学びも多い。
- ・ 耐火耐震構造や温湿度管理設備等、文化財の適切な保存又は公開のために必要な措置が講じられている公開承認施設とすることにより他機関所有の重要な文化財の鑑賞の機会を生む。
- ・ 誰でも公平に利用できるインクルーシブの視点、人の埋もれた機能の回復につながる福祉・医療の視点を持った場をつくる。

## (2) 調査研究機能

- ・ 博物館を研究施設として位置づけ、先端的な研究成果を反映する。
- ・ 資料の価値をブラッシュアップし、資料の魅力を高めることにより、山形県の魅力を伝え、利用者の興味関心を喚起する。
- ・ 県立博物館にしかできない調査研究は何かを考え、その研究成果を世界へ発信する。
- ・ 高度人材の共有を図り、調査研究により山形県の資料の魅力を高め、研究機関として山形県の文化財を守り活用する。
- ・ 学術機関だけではなく、教育機関という両面性を持った博物館活動を行う。

## (3) 収集・保管機能

- ・ 山形県の自然、文化から何を未来に継承していくべきか考え、他機関と連携し、選び、収集し、未来に継承していく。
- ・ 山形県の自然や文化に関わる様々なものを守る。
- ・ 収集機能の拡充は最優先課題であり、将来の収集機能の不足への対応も含め、面積的にも余裕のある収蔵庫を検討する。
- ・ 地域の収集機能を支援し、各機関の成果を共有する。
- ・ 文化財の保存に関する取組み等により、美術工芸品も含めた地域文化を損失のリスクから守る。
- ・ 無形の資料等、触れられない資料をデジタル化し、収集保管する。デジタルアーカイブは力を入れた方が良い。

## (4) 教育普及機能

- ・ 学ぶことを楽しみ、知識欲を満たす場となる体験講座、各種講座、地元在即した体験等の充実を図る。
- ・ 小中学校の児童生徒を対象とした施設見学の実施の他、教員の相談先となる、遠方の学校に対する博物館資料貸出キットを作成し提供する等、多様な関わり方で学校教育と連携する。

## (5) その他の機能

### ① 情報発信

- ・ 継続した県立博物館の利用につなげるため、収蔵資料の新たな魅力や見解を提示する。
- ・ 職員一人ひとり、博物館に関係するみんなで、わかりやすく、博物館活動のプロセスをしっかりと見せ、活動にこめられた職員の思いをしっかりと伝える。
- ・ 県立博物館の活動を、世界を見据えて国際的に発信する。
- ・ 県内博物館等関係機関のデジタル技術の共有等による情報の統一化を図る。

## ② 交流

- ・ 目的が明確でない多様な人たちも受け入れる緩い場として存在する。
- ・ いつでも誰とでも訪れることが出来、遠方においてもアクセスでき、多様な人と一緒に、くつろげる場、公園のような働きを持つ博物館をつくる。
- ・ 県民が主体的に博物館について考え、自分たちのものにしていくのだという意識を醸成する。
- ・ 県民の学べる場やコミュニティづくりなど、交流の継続につながる取り組みを行う。

## ③ 多様な主体との協働

- ・ 日頃の博物館活動の中から県民とのゆるやかなネットワークを形成し、持続的な博物館活動につなげる。
- ・ 様々な人が博物館の活動に関わり、学ぶことにより、そこから新たな事業へ繋げる。
- ・ 山形県の自然と文化の継承のため、各地域に入り込み、草の根的な活動を通し県民の意見を十分に伺い、県民の視点を持ち、様々な人が参画し、人同士が連携し、外に開いたインクルーシブな組織をつくる。
- ・ 各機関が実施する歴史研究を進める活動が絶えず更新されていくように支援を行う。
- ・ 文化の保存と活用に関する寄付の受入や人材共有の仕組みをつくり、県内企業の地域貢献の受け皿となる。
- ・ 山形県の地域産業や食文化を支える歴史ある地元企業との企画展の実施など産業文化の視点を取り入れる。
- ・ 大学教授やデザイナーなどの高度な人材を社会の様々なところで共有する。
- ・ クリエイター、アーティスト等、新しい山形県の文化を担う人と、新しい文化をつくっていく芽を共に育てる。
- ・ 小さいラボが無数にあることで結びつきがたくさん生まれ、身近な自分事として、博物館を考えるきっかけをつくる。
- ・ 様々な企画を試しにやってみる実験場的な場所やプログラムを設定し、学ぶことを楽しみながら、新しい知や結びつきと出会う場をつくる。
- ・ 実験をしていく、試していくという積極的な活動を発信する。
- ・ 他の人との関わりの中において取組みをブラッシュアップし、コミュニティの維持やつながる場所となる拠点をつくる。

## 4 魅力のある持続可能な博物館運営に向けて

### (1) 人材育成・確保

- ・ 博物館は人がつくっていくものであることから、学芸員の人材育成に取り組みとともに、大学等研究機関との高度人材の共有を図り、外に開いていく組織運営を行い、自己完結型ではなく、連携型の運営・組織を実現する。
- ・ 県立博物館の使命に基づき、館長、学芸員、事務職員、各職務の専門的力量向上に努める。
- ・ 各部門に常勤の研究職として学芸員を複数配置し、館の使命に基づく基幹機能の向上を図る。
- ・ 学芸員は、博物館における利用者の行動を実際に見て、利用者のニーズを直接的に知ることにより、資料と博物館利用者をつなぐことを意識する。
- ・ 人口減少や外国人人材の増加等将来の社会変化を見据えるとともに、職員の能力向上に結びつけるため、外部からも積極的に人材を招請し、連携を図り、様々な人材が活躍できる環境をつくる。
- ・ 従来 of 体制に加え、マーケティング力の強化等に向けて、新たな人材の確保や体制強化又は外部人材の招請や連携を検討する。

### (2) 業務の効率化

- ・ 県立博物館職員の負担を減らし、業務に集中できるように、博物館の経営や運営分野のDX化を図る。
- ・ 地域の各博物館の組織横断的な統一したデジタル化により効率化を図る。
- ・ 博物館の必要性を踏まえた課題解決型官民連携の視点について検討する。

### (3) 財政等の基盤の確保

- ・ 低廉な入館料を維持するために、外部資金獲得などの支えの仕組みをつくり、支え手と博物館の濃い関係をつくる。
- ・ 資料購入のための基金創設を検討する。
- ・ ショップやカフェ・レストラン等において利益を生み出す取組みを検討し、その利益を博物館運営の財源の一つとする。
- ・ 博物館の円滑な運営を担保することで、地域や子ども達、文化財の保存に関する取組みに還元する。

### (4) 評価検証

- ・ 社会全体に影響を与えるような博物館になるために、ウェルビーイングなど博物館の使命・役割に基づいた目標を設定し、博物館の成果を評価し、改善を図る。
- ・ 定量的、定性的なデータを取得し、来館者、非来館者のニーズを探り、県立博物館の強みと弱みを把握し、マーケティングに生かす。

- ・ 子どもの頃博物館に訪れた人たちが10年後、20年後にどれくらい再訪しているか等、リピーターの基礎データを蓄積し、博物館の強みと弱みの分析につなげる。

#### (5) 社会との関係性の強化

- ・ 既存の利用者層にとどまらず、ターゲットを拡大し、社会的包摂の視点を持ち、専門家との連携も含め、間口を広くすることにより、多様な需要の開拓につなげる。
- ・ ターゲットを設定し、機会を逃さない連続した発信及びターゲットの意思や感情の収集等、双方向コミュニケーションの実践により新しい需要を発掘する。
- ・ データを集め、学芸員、事務職員等が一緒のチームで、コンベンションビューロー等の関係機関と連携し、国際会議や観光ツアー等ターゲットに即した体系的な誘致活動を実施する。

### 5 開館に向けた取組について

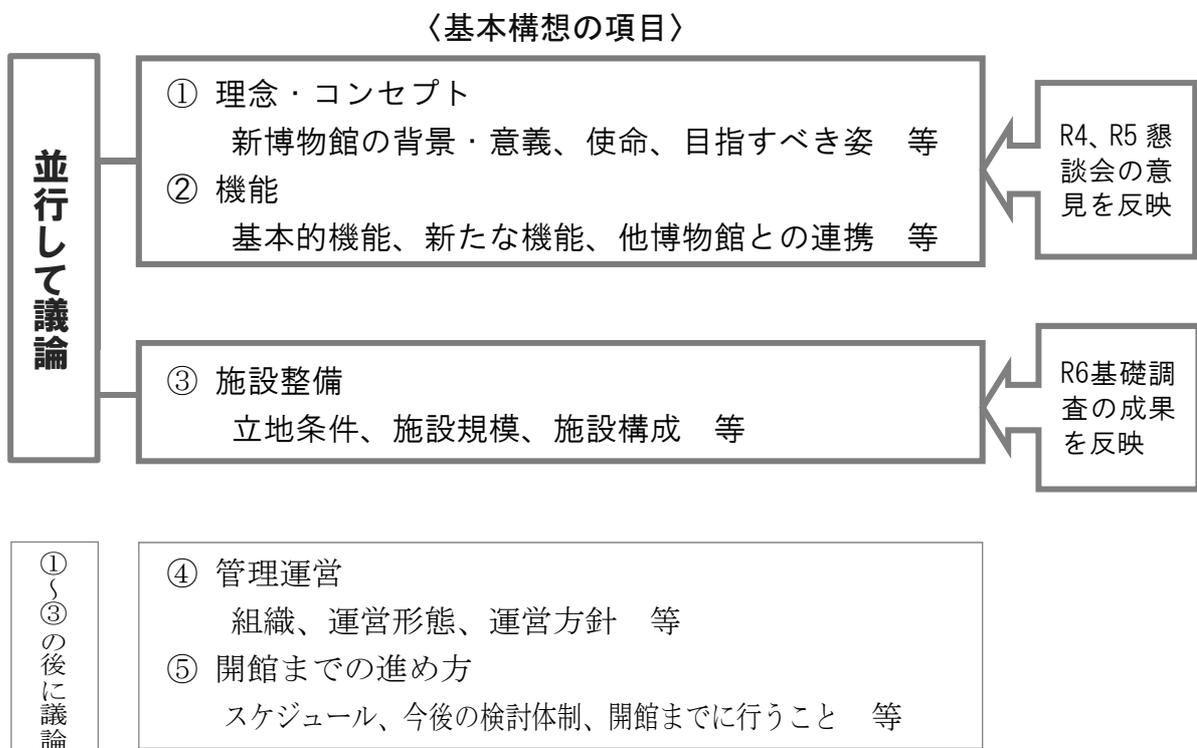
- ・ 博物館の役割を多くの人に知ってもらうため、新博物館開館までの10年間に何ができるかということを考える。
- ・ 開館までの10年間に、リピーターや学校団体の基礎データをしっかり取り、博物館の強みと弱みの分析につなげ、利用者や学校団体が利用しやすい県立博物館となる仕組みをつくる。
- ・ 開館までのプロセスを可視化し、地域を巻き込み、一般の方と意見交換をしながら、思いをしっかりと伝え、ミュージアムをデザインしていく。
- ・ 開館までの間にコミュニティの形成を図り、成長し、オープンにつなげていく。
- ・ 実験場については、計画段階から取り組み、みんながやりたいことを気軽に実現できる場をつくる。
- ・ 開館までの社会状況や技術の変化を見据えて、その中で、リアルならではの、オンラインならではの体験を設計する。

## 新博物館基本構想策定に係る今後の進め方について

### 1 基本的な考え方

- 令和4年度、令和5年度の懇談会において、新博物館の理念・コンセプト等の検討材料となり得る新博物館の目指すべき方向性や新博物館に求める機能等について、意見を聴取した。
- 令和6年度以降、新博物館の基本構想策定に向けて議論をより具体的に前に進めていくためには、理念・コンセプト等の議論と並行し、立地条件や施設規模等の施設整備の方針についても議論を進めていく必要がある。
- そのため、これまでの意見を踏まえ、新博物館の理念・コンセプト等のたたき台を早急に整理するとともに、施設整備の方針につながる基礎調査を開始し、その成果等を次回以降の委員会での議論に反映していく。

#### ≪ 新博物館基本構想の項目建てと検討の進め方のイメージ ≫



## 2 スケジュール

令和6年7月

### 【第1回委員会】

県立博物館の概要やこれまでの経過等を説明し、今後の進め方等について協議

7月～

- ・事務局による有識者や関係者へのヒアリングの実施
- ・委託業者による基礎調査の実施（下記①～⑥）

（7月～11月）

[各委員との個別の意見交換]  
新博物館の理念・コンセプト（たたき台）並びに立地条件等について意見交換

11月頃

### 【第2回委員会】

基本構想における新博物館の理念・コンセプト並びに立地条件等について協議

《基礎調査の状況報告》

- ① 他県における持続可能な博物館の設置例調査
- ②-1 パターン別事業費シミュレーション（条件、パターン）
- ③ 収蔵庫調査

（11月～2月）

[各委員との個別の意見交換]  
基本構想の中間取りまとめ（たたき台）について意見交換

令和7年2月

### 【第3回委員会】

基本構想の中間取りまとめ案について協議

《基礎調査の状況報告》

- ②-2 パターン別事業費シミュレーション（費用、比較）
- ④ 小中学校（教員）調査
- ⑤ デジタルアーカイブ調査
- ⑥ 事業者ヒアリング調査

3月

基本構想の中間取りまとめ

## 委託事業者による基礎調査の概要

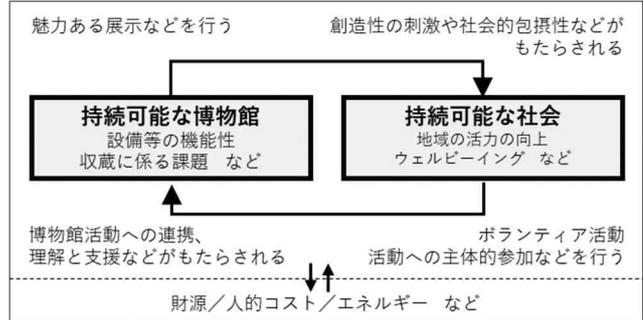
<b>① 他県における持続可能な博物館の設置例調査</b>	
実施期間	7月～10月
調査概要	博物館自体の持続可能性と博物館が育む社会の持続可能性との両面から他県における事例を調査し、事業方式、NPOや事業者との連携など、持続可能な博物館の多様なあり方を示す。資料調査とヒアリング調査を併用し、人・もの・連携・コストの4つの視点から整理・分析を行う。
委員会の議論への活用	新博物館が目指すべき、持続可能な博物館としてのあり方を議論するための参考事例として参照し、新博物館の目指す姿や基本的な性格等、理念・コンセプトの検討に活用する。
<b>② パターン別事業費シミュレーション</b>	
実施期間	事業費調査・条件パターン設定：7月～10月、試算・評価：11月～令和7年1月
調査概要	持続可能な博物館の施設条件、運営条件を他館データから整理し、全機能一体型や機能分散型等の多様な設置形態、建築グレードなど事業費試算のパターンを設定する。事業費試算を行い、新博物館の課題を踏まえて総合的な比較評価を行う。
委員会の議論への活用	新博物館の整備方針、施設規模や機能構成を議論するための資料として立地条件等の協議に活用する。また事業費、人件費、維持管理費など費用の性格別に整理し、比較検討や施設整備の課題の抽出に活用する。
<b>③ 収蔵庫調査</b>	
実施期間	7月～10月
調査概要	現博物館に収蔵されている資料のボリューム及び増加率を調査し、新博物館に必要な収蔵庫の規模や仕様等の概略を示す。加えて先進事例の調査から収蔵資料の効果的・効率的な管理や将来的な増加への対応について手法の整理と分析を行う。
委員会の議論への活用	新博物館に必要な収蔵施設の規模、整備方針を議論するための資料として立地条件等の協議に活用する。また先進事例は、将来的な収蔵資料の増加を見据えた、新博物館における収蔵庫や収蔵計画の理念・コンセプトの検討に活用する。
<b>④ 小中学校（教員）調査</b>	
実施期間	定量調査：7月～10月、定性調査：11月～令和7年1月
調査概要	小中学生の利活用促進における課題を把握し、解決策の糸口を見つける調査。県内の小中学校教員を対象としてアンケートによる定量調査と、定量調査を踏まえたグループインタビューによる定性調査を行う。
委員会の議論への活用	アンケートによる定量調査の結果は、新博物館がどのように小中学生の学習に関わることができるか、という教育普及・学習支援の観点から、新博物館の理念・コンセプト検討に活用する。グループインタビューによる定性調査で見出された課題は、新博物館の機能や活動を検討する段階で参照し、構想検討に活用する。
<b>⑤ デジタルアーカイブ調査</b>	
実施期間	7月～令和7年1月
調査概要	ヒアリング調査によって、現博物館のデジタルアーカイブの構造や課題を把握し、今後の展開の可能性を分析する。また、資料調査とヒアリング調査により県内で運用されているデジタルアーカイブの状況整理と県外における先進事例の整理・分析を行い、デジタルアーカイブ構築までのプロセスや活用の可能性を調査する。
委員会の議論への活用	調査によって整理された、デジタルアーカイブの構築や持続的な維持管理の状況、活用によってもたらされる県民の資料へのアクセシビリティ、県内の既存アーカイブとの連携などについて、新博物館が担うべきデジタル領域における機能や活動を検討する際に参照し、基本構想の中間取りまとめに活用する。
<b>⑥ 事業者ヒアリング調査</b>	
実施期間	7月～令和7年1月
調査概要	山形県内の大学や事業者へのヒアリングによって、新博物館の活動に期待することや、博物館活動への連携、民間活力の活用の可能性などを調査する。
委員会の議論への活用	教育・研究機関との連携による新博物館の基本的機能の強化や、事業者との連携による博物館活動の広がりについて調査結果を整理し、新博物館の機能や活動を検討する段階で参照して基本構想の中間取りまとめに活用する。

## ① 他県における持続可能な博物館の設置例調査

### 1-1. 調査概要

「社会と博物館の2つの視点から持続可能な博物館の在り方を明らかにする」

- 「持続可能な博物館」には大きく二つの視点、一つは博物館それ自体が持続可能であり、もう一つは博物館が持続可能な社会を育てていると考える。構想から施工、運営に至るまでの豊富な実績と全国の博物館ネットワークを活かし、多様な“持続可能な博物館”のあり方を明らかにする。



### 1-2. 調査内容

- 4つの視点（人の視点、ものの視点、連携の視点、コストの視点）から、資料調査を行う。特に詳細な情報が必要な場合にはヒアリング調査を行う。

4つの視点	
人の視点	職員、地域住民やボランティア等の主体的・継続的な活動
ものの視点	施設・設備の機能性、環境への配慮、展示の魅力・包摂性
連携の視点	博物館・教育機関、地域コミュニティ、企業との連携
コストの視点	設置・運営における財源、民間活力の導入

## ② パターン別事業費シミュレーション

### 1-1. 調査概要

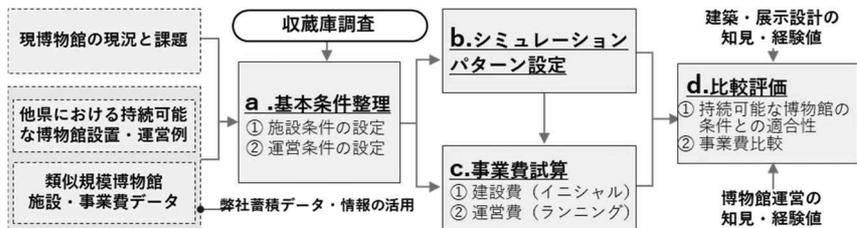
「新博物館が対応すべき3つの課題を軸に、持続可能な博物館を実現する多様なアプローチを示す」

- 現博物館の現状を踏まえて整理された新博物館が対応すべき3つの課題について、他県における事業費のシミュレーションを行う。持続可能な新博物館のアプローチを複数パターンとして整理し、事業費を試算。新博物館が対応すべき3つの課題と照らし合わせ、総合的に比較評価する。
  - (ア) 魅力ある展示（「理解しやすい」、「楽しく学べる」）
  - (イ) 収蔵に係る課題への対応（将来的なさらなる資料増加への対応を含む）
  - (ウ) 学芸員等の博物館で働く者にとって機能性の優れた設備

### 1-2. 調査内容

#### ● 調査の考え方・作業の流れ

- 「持続可能な博物館」の実現に向けて、従来の博物館整備のパターンに限らず、多様な博物館設置・運営のあり方をシミュレーションする。



a. 基本条件整理	施設条件と運営条件の設定を、他館事例と弊社運営館の経験値を組み合わせ、各条件を設定する。
b. シミュレーションパターン設定	従来の博物館で一般的な全機能一体型だけでなく、機能分散型等のパターン案を検討する。
c. 事業費試算	b.に基づき、建設費（イニシャル）、運営費（ランニング）を試算する。
d. 比較評価	定性的評価（持続可能性における課題適合性）と定量的評価（事業費比較）から比較評価を行う。

### ③ 収蔵庫調査

#### 1-1. 調査概要

「運用しやすく、保存環境が整った“持続可能な収蔵庫”の概略を現場取材とデータ収集から探る」

- 昨年度調査にて行った結果を踏まえ、現状の資料のボリューム及び増加率をさらなる詳細調査・ヒアリングから把握して新博物館に必要な収蔵庫の規模・性能・仕様等の概略を示す。
- 新博物館の収蔵庫は、文化庁の指針等を参考に性能や仕様を検討し、資料の増加率と余剰率を見込んで十分なスペースを確保すること、“持続可能な博物館“の観点から、再生可能エネルギーの積極的な活用など、収蔵庫は環境へ配慮した性能を持つことが求められる。
- 東北では最多クラスである 30 万点を超える収蔵資料のボリュームに加え、7 分野に及ぶ資料の性質を考慮した収蔵環境や資料整理プロセスを調査・検討する。

#### 1-2. 調査内容

##### ● 調査 1：他館事例比較（資料調査・ヒアリング調査）

- 立地条件や施設規模、施設構成の方針検討では、他館事例を収集して比較し、山形の新博物館の場合はどうなるか、というマクロな視点から考えることが必要。
- 各事例の資料数や資料の増加率、管理運営コストなどの情報から、新博物館が参考とすべき規模や仕様の指標をピックアップする。
- 主に以下の 3 種類の事例について調査を行う。
  - A) 新しい収蔵庫事例：収蔵庫の規模・仕様等の決め方や資料移転のプロセスを中心に調査。
  - B) 総合博物館の事例：開館時からのコレクションの変化と増加率、収蔵庫の不足への対応を中心に調査。
  - C) その他参考事例：収蔵庫の機能性やエネルギーコストなどの側面において特徴がある事例を中心に調査。

##### ● 調査 2：山形県立博物館職員ヒアリング（ヒアリング調査）

- 新博物館に必要な収蔵庫の規模・性能・仕様等の概略について、調査 1 によるマクロな視点からの他館比較に、現博物館の実態に即したミクロな視点での根拠づけを行う。
- 分野別の収蔵庫の使用率と資料の増加率を把握することで、現状に即した新博物館の施設規模、施設構成を示すことができる。